

## 『Diamond Lily』

鉄筋コンクリートに根を張る灯火 傷口は楽器 掻き鳴らす痛み

三日月の様に欠けた爪のメロディー 25時の喘ぎダイヤモンドリリー

白いシーツに赤い染み 唾液絡まるAKAI MPC

寝起きと共に止める12inc あくる日も続くあくびとコーヒー

向こう岸を知り終われないしりとり 物知りの愚痴、掬う塵取り

早とちり噛んだ苦虫は美味 問いかける鏡に映る君

霧がかかる視界に斬り掛かる已むなし 言葉が奔り血がべっつりの歯ブラシ

その日暮らし突き立てる鶴嘴 ただの紙に宿る神々

911テロがあると知っていたかの様なカメラアングル

勘ぐると抜け出せないジャングルで感覚と理屈のアンサンブル

サンプルにできないおしめ無しの雄蕊 受粉する升目無しの雌蕊

人の畝、膨らむ悩みの種 羊の群れ 塞ぐ胸 注ぐ村雨

2つの目を閉じ芽は突き破る紙面

産声と断末魔、伝うラインは枝 スピーカーから咲く花

鉄筋コンクリートに根を張る灯火 傷口は楽器 掻き鳴らす喜び

三日月の夜に満ちた未完メロディー 29時の顔き ダイヤモンドリリー

## 『Blue Monkey』

宇宙船地球号とある情熱大陸 ソラシド二足飛行 企む青い猿

見猿 聞か猿 言わ猿 ではなく 戦慄く愛憎しかと見て聞いてキック座バースでござる

名無しでもいいですが電気信号言語ヴェルチカ

名前が無くなっても変わらないフローとライムは

ハイハット スネアに溺れ目の下に隈 繰り返しては一つ覚えで砕くスカウター

脳内の包帯 取り現す正体 超自然体『8』の字押し倒す変態

石橋壊れるまで打っ叩くあいつ お節介なブラフに返す 台詞に雀斑

一つの輪郭から溢れ出す百八 一纏め鞆に収め夜更け芽吹く三つ目

風雨霰に打たれても、錆びない黒金 生死問わず粋た答え 我生まれ葉隠れ

ノイズに着地アイデア捻る蛇口 命を別ち『art of rhyme』死せる詩人

町から街 光化学スモッグを纏い 裏路地 嘘で物語る深層心理

心臓の振動パッドで解く武士 インクが浸透するタクトで書き換える黙示録

白く見せる私欲に溺れる湿気もくも口説く マイナスの磁力で遠ざけ奪う重力

19の夜から迷いを詠う迷わず 沈黙で語る樹木が観客の路上から今ここにいる

壊れたジュークボックスの様に変えられない曲目だったらなんだ？

その中 踊らされる事無く 無尽蔵 広がる内側

また 空白が呼ぶ お前の分の余白を残す なんなら、、、

青い春 青い夢みる情熱は舌足らず ゴミ袋を破り外を見せてくれるカチガラス

黒い○ 白い× 尖る青い△ 言いかける言い訳忘れ駆けてく灰色モラトリウム

『まもなく』はやってくる絶え間なく 近づくのはお前の鼓膜ではなく脈拍

必ずがないからやりがい足掻く 弱音に抗う

見えないゴールに逐一シュートする日々 手招き出口は入り口

造られた流行りの歪みに浸り直向きな君に 日陰から歪み奏でる猿の囁

猥褻ノイズふしだらな実験 排泄ボイス混ぜるな危険

猥褻ノイズふしだらな実験 排泄ボイス混ぜるな危険

眉間に寄せる集中力切らした後のアート 未来？過去？ 踏みしめる@

イエローの肌に逆立つ毛並み藍色 生る事に恋い焦がれた叫びコバルト

ノイズに着地アイデア捻る蛇口 命を別ち『art of rhyme』死せる詩人

町から街 光化学スモッグを纏い 裏路地 嘘で物語る深層心理

# 『Future Line』

イントロからシンクロ率 不協和音の旋律 陰と陽のキス  
当て付けの愛情 苦しみの抱擁 巻き戻し不可能 俗に言うハイライト  
スポットライト浴びたい家庭 これは幸せまでの段階過程  
宗教 鼠講 薬 タバコ ギャンブル アルコール 暴力 借金 依存症  
模範解答的 反面教師だから 札を外し我が道 創るキョンシー桑原  
だが対話しないその有様 はてな隠したまま サハラ泳ぐ魚  
痛みだけじゃないだろ過去? でも いつの間にか腐敗 宝箱  
嫌いになりたくないから 一緒にいたくないのかもな  
  
一人食卓 ケータイは防具 電子記号に感情を注ぐサイボーグ  
ポーカーフェイスはお上手 固まった蠟燭 無駄に丈夫な心臓は凹凸  
ちぐはぐなまま 繰り返すただ チクタク進む中 慣れ薄れるダークマター  
瞬く間 子供から大人 ふと鏡の中 外側 年老いたあなた  
屁理屈 まるで丸く見せる地球 へばりつくムーン 矛盾産むループ  
シンプルな二択 捻りメビウス 見返りはいらぬ 大嫌いで愛してる  
思考の果て そこは最前線 めっきが剥げ 濃くなる生命線  
スピーカーの前 塗り替える譜面 宛先不明の感情を零す人間  
  
穴開きっぱなしの燃えるゴミ 目印代わり 落とした痛み書いた紙  
ギグザグな道 いくつもの蕾 もう未来は譲れない 辿る青天の霹靂  
尖る2B 奔り 生き急ぐ濁いた汽笛 カササギのよう飛ばすモノクロ紙飛行機

## 『Lost July』

凍てついた炎天下　　焼き付いたままもう何年間の  
時がでも今も尚　　アスファルトと心臓焦がす太陽  
体温と共に上昇する気流　　昔、期待膨らまし飛ばした気球  
いつの間にか積乱雲　　ブルーな通り雨に阿吽  
呼吸合わせザブーン潜る　　脳の溝　　化膿した海の底  
細々と痩せ細った青の焰　　揺れる程　　頬伝う鼓動  
強盗の様に拭い染み付く袖　　盲目の夜　　壁抱きしめる為の糧  
蠟の羽　　溶けるまで　　近づく失った声　　耳鳴りの果て  
雨後　　深まる命　　湿った匂いも愛おしい今は  
約束とは違う場所に立つだが　　役立たずだったはず  
あの夏の少年がニヤリと銀歯　　履き潰したスニーカー　　小さい掌  
正念場押す背中　　ひとひらの若葉今も尚　　年輪の中  
忘却の彼方から連れ戻す『あなた』　　空を知った今だからこそ  
ラジオ体操夜更かし朝寝坊　　道路脇　　蒼蒼　　ソメイヨシノ  
遠出の帰路　　パンクしたチャリンコ　　泥んこのお下がり乾かす落陽  
シアン　　マゼンタ　　ブラック　　イエロー　　じゃ思い出せない陽炎の先へ問う  
点と点を結ぶ　　懐かしい風が吹く　　晴天を突く　　微かな声がする  
線と線を解く　　はじまりのベルが鳴る　　地平線へと続く　　確かな今が進む  
色褪せない記憶　　無二の世界　　存在は淡く　　ロストジュライ  
もう曖昧な記憶　　不意に眩暈　　現在を保つ　　ロストジュライ

# 『The Last Scene』

夜が長くなる季節 路地裏の電柱にもたれかかる

屈折したスポットライトの光に挫折する役者は静かに笑う様に肩を震わせる  
暖かく積もる白は埃を誤摩化して溶ける チクタク春を待つ時計の針も凍るのに  
しつこいくらい一昨日を問い続ける言い切れない思いは今日に追いつけない

当たり障りないささくれた手では覆い隠せず あくせく急ぐ木偶

顔の無い誰かの手前こんなにも明るく寂しく戯けるのです

無理をさせたくない私は自ら頑張る事を選んだ気持ちを憶えてるのかな

最初はもっとあなたの笑顔を見たいから それだけでただ、

期待した言葉は雲になって水に変わり あの夏の晴天の下 土砂降りに  
そして今も血液になって掻き乱して それも愛しくて飽きのこない耳に住み着いた鈴虫

ドラマや映画とは違いラストシーンはこんなにも素っ気ない

無視しない無機物はぶつくさ言わず頷く まるで知っていたみたいに

歳をとった飼い猫がそっといなくなる時と同じく優しく

世界の中心だというのに カメラは無い ここには誰もいない

そんなに優しく地球は回るから産まれた時に発した裸の叫びに身体が喜ぶんだ  
一度死んで二度産まれたのだからエンドロールに名前を残す事なんか忘れて

笑って死ねるまで何度も立ち上がって打ちのめされに行くんだ

最高の死に様を迎える為に最後の連続を生きるんだ

今日の私はカッコいいと言い切るのさ

## 『ジャポニカ学習帳』

常識に袖をとおし 思い残し 離れる肉体 つまんない

夜通し 灰にする闘志 内側で鳴り止まないチャイムがご案内

この通学路に轍は無い 経験したいが故 踏み外した次第

失態が拍手喝采に変わるのはいつだってかまわない 飾らない

先輩はいつまでも若い お前なら越えてゆけると疑がいもしない

心配はいらない 起立気をつけ 休め好きな時にでも戦え

前に習え、そしててめえの席につけ 時代背景どこでも机

一夜漬けなんか忘れ 今を求めろ テストは零点でも始まりのゼロ

黒に濁点のグロ 溢れるゲロをぶちまけたノート 濃度

濃い二回目夜のおはよう 今宵も開くジャポニカ学習帳

捲るページ廻るイメージ 三途の川 行き来する為の定期

息切れする不景気こそ好機 コーヒーが滲む白紙の新天地

ますますマスに収まらない文字 瞼の裏 不埒な造形美

ため息の後 深化する遺伝子 よく似合う砂嵐のテレビ

月面へと続く渡り廊下 歩ませる鳥肌 吐血拭う白旗

作品は墓 ビューティフルルーザー 殺される前に自ら切る腹

がたがたはたまたなんだかんだ 御暇な方々に巻き付ける腸

横殴りの性 芯だけ残る傘 白い闇の中 黒光りのマラ

奇想天外 摩訶不思議 期待はしてない 間違いと正解 どっちだろうとうるさい

ケシモク吸って 飽きるまで味わって 繰り返す宿命なんて変えてしまえ

『何もいらいない』という感覚をもっとちょうだい しかたない世界へ舌だして巡回

『これまで』から『その日まで』楽しんで待とう また会おう 遥か地下 雲の上

常識に袖をとおし 思い残し 離れる肉体 つまんない

夜通し 灰にする闘志 内側で鳴り止まないチャイムがご案内

したい事もせずに死体 言いたい事も言えない機械みたい まるで地獄じゃない？

大嫌いな あいつと大笑い 我がままかい？生きてる間に天国が見たい

楽しくて謳う 厚みが増す 終わらない始まり二冊目が待つ

苦しいともがく 厚みが増す 終わらない始まり十冊目が待つ

全部手放す 厚みが増す 終わらない始まり百冊目が待つ

白髪と発達 彼奴への挨拶 黙殺した奴すらも導く松明

ワイシャツで平然を装っても所詮 毎晩 瘡蓋が捲れ奪還

金力ネかねの背面 皺寄せの螺旋階段 登り詰め得る快感

いずれ棺桶から産声 あげる髑髏 ヘシ折れ松葉杖 振り返らず進め

仮性包茎 喉ちんこ 腫らし叫べ 子宮へと響け アッチョンブリケ

奇想天外 摩訶不思議 期待はしてない 間違いと正解 どっちだろうとうるさい

ケシモク吸って 飽きるまで味わって 繰り返す宿命なんて変えてしまえ

『何もいらいない』という感覚をもっとちょうだい しかたない世界へ舌だして巡回

『これまで』から『その日まで』楽しんで待とう また会おう 遥か地下 雲の上



## 『carpe diem』

夜が明け朝日が香る 昨日 今日 明日が交わり始まる

2度来ない日々をデジャブ贅沢 景色変わるレール上を同じ様に往復

薄っぺらいテレビを見れば気がまぎれる 冷静な振りをして社会に溶け込む

人混みの中に蔓延る強欲 勝負してないのに敗北のレッテル

知られない声は空を斬る ビルとピルの谷間に死ぬ真実

太陽と月はアダムとイヴ 青から赤 廻る禁断の果実

澄んだ目で憐れむならほっといて 汚い嘘に囲まれてほっとして

正解のない世界を敵に回して 不器用な愛を背中に隠して

人生は楽しめる13階段 成長半ば登りきるのは正常な判断

と思えそうだ、取りあえずで詰まった算段 でもまた繰り返すアンフェアな等価交換

幸か不幸か先駆者もチラホラだが 欲しいモノは札束の隙間、確かな残り香

焦りが濃んだ地団駄の下 潰れた花がある事もわかっていたさ

不確かな14段目に差し掛かってから 抜け殻の散らかった部屋で根ざす在り方

赤裸裸に過去を蒸し返し角度 変えたところで葛藤する悪路 迷子がする覚悟

知られざる最後 向かう1歩きっと 跨ぐ昨日 未知なる軌道

腐りかけのリンゴをかじりまた自問自答 手探りパンドラの箱の底

夕暮れ潜む影 伸びる背丈 湯船に溜める でまかせでたらめ  
肩まで浸かる十数えるまで パラドックス見える斜塔 背比べの訳  
止まれを進む傀儡が捜す 黒幕は居留守 立ち尽くす理屈  
口に広がる鉄 ここらでギブ? 変わるのはいつ?と無意識が呟く  
世間は愛で満ちている今日も 抱えたくない悲しみが溢れていく明日も  
めくりめく程、巡りくるNOと 断れない死は 合わず増えていく皺  
道端の花束よ、強さって何だ? 辿り着くいつか どう在りたい今は  
老いていく身体 自慢げな折れた鼻 欠けた月の下 時は満ちたそんな気がしたんだ

理想と現実の間 境界線を振り切ったクロスフェイダー

歪み傷ついた円盤 走り慣れた道 深く飛ぶんだ

振り出しがゴール 1ループその奥 死えと刻一刻 吐く色濃く  
主人公らしく カッコつけては転ぶ 片足はドブ でも口元は綻ぶ

シンプルだが単純じゃない 絶望のカタチなんて数えきれやしない  
希望は握った拳の中に 開かないと気付けない 片手では愛せない

この言葉は僕が鏡変わりに使った瞳、死んでないだけで生きてないおまえに、

今日ぐらい寝なくていいだろ? 死にはしねえよ さあ行こう

## 『なんとなく』

寝すぎて疲れた 朝方まで遊んだ次の日の夕方

少しもったいない気分 どうやって帰ったのか 記憶もない贅沢

まず最後の一箱と決めたタバコ探すところからスタート

だいたい決まってあそこ 裏返ったジーパンの後ろポケット

やっぱり でも中身は空っぽ それならそれで、、、諦めつく訳もなく

じらされた男 くたくたのTシャツからくしゃくしゃのワイシャツに

何となくジーパンの裾から入れる足 イヤホンを装着 財布持ってサンダル

地味に距離のあるコンビニに お気に入りの曲をとばす 何となく

歩く縁石の上 フェンス伝う手 排水溝を眺め 流れに逆らう魚

たまに首を傾げ斜め 逆さま 無駄に鍵を振り回す

何となく 変な顔 目が合うバスの乗客 バイパス 回り道 曲がる角

笑う門には福来たる ベタつく踵 いつの間にか踏んだガム

いつか見た顔とすれ違う 伸びた陰を踏まないようにジャンプ

ふと見上げると音符に変わる 電線に並ぶカラス

イヤホンにとって音楽を聴く いつもの歩幅 僕だけリズム

沈む 橙に手を伸ばす 深呼吸 野良猫にth,th,th,

スピーカーを切って音楽を聴く 使い古した言葉 無言のイズム

過ぎる あなたの手を離す 大丈夫 何とかなる気がしてる 何となく

蹴り出す小石 愛おしい 又となく 出会いはどれも懐かしい  
けどここでお別れ 扉を押さえてくれた前の人に感謝が詰まりお辞儀  
目当て手前 手に取る週刊少年誌 捲る 加齢臭が挟まったページ  
ところどころメジャーどころの後 自分に似た呼吸をする  
読み続けた漫画は打ち切り そっと閉じ いつものじゃない銘柄  
たまには って吸って吐く台詞『最後はこれじゃないな』  
一人苦笑いする帰り道 伸びる飛行機雲  
開きっぱなしの口 UFO あの子の町まで架かる虹  
本当のシャッターチャンスならファインダーから離せ執着 どうせなら  
外れた枠 広がる余白 ワクワクが待つ 点が重なるワンシーン  
漠然とした不安を殴る覚悟ある安心 どこかの家のカレーの匂いが暗示  
灯台下暗しな暮らしに出す辞表 さあ これから どう楽しもう  
  
イヤホンにとって音楽を聴く いつもの歩幅 僕だけリズム  
沈む 橙に手を伸ばす 深呼吸 野良猫にth,th,th,  
スピーカーを切って音楽を聴く 使い古した言葉 無言のイズム  
過ぎる あなたの手を離す 大丈夫 何とかなる気がしてる 何となく

## 『into oblivion』

朝日 西に薄れる星と月 目覚まし止めて あくび

背伸び ふらつき トイレまでの道のり

裏路地 光に包まれ安心する街頭の明かり

焦燥の波の満ち引き 忙しい流れの足し引き 息を殺して行き来

ネオン街の電球が眠る昼下がり 掃除機に正直に何も言えないテレビ

華やかな頭を支える茎 雨上がり コンビニの出口 傘はひとりぼっちの集い

夕日に伸びた影が溶けていく暗闇 靴底 踵 眼差しと同じ角度にすり減り

『ありがとう』を上回る数の『すみません』はロキソニン

もう何も感じない もう何も感じない

丑三つ時 独り占めして欲しい 公園の滑り台

学校の人気の蛇口 蹴りやすいサッカーボール

冷蔵庫のいびき 受話器越し 嘘つきな君に相づち

好きじゃなくなっても愛する日々

目で聴いたメロディー 耳で舐めた苦み 舌で触れた温もり 鼻で見た風景

肌で吸った臭み 目で嗅いだ香り 耳で触ったひんやり 舌で覗いた景色

鼻で味わった酸味 肌に響いた嘆き

目覚めるべき時まで神隠し あなたが見つけてくれる『その日』を黙って待つ身

不確かに僅かに伝う叫び 確かに微かにすぐ隣に不可思議

意識の外 無意識の内 急かさなない魂が浮かべる笑み

## 『墨汁sonic』

遙か地下 雲の上 涎垂らす 不自由は力 奔る筆 変化する相変わらず

¥タウンから流離う鋭角 点で円を描くわんぱく坊や

拡声器確認あかさたなはまやらわの鮮やかさを明白

浅はかなあるがままを抱いた 木霊求めた舌は諸刃

刀身の隅々まで染み 渡らす墨 空白にのらり漂う息

驚きにひた向き 天体を下敷き くらり習字代わり案山子斬る生意気

日常に『なぜ』の火種を孕ませ 日陰でも光れ 大地のしらべ

燃えて灰となりて飛ぶ三千 廻る青い石の上 不完全な座禅

360°囲む韻律 四六時中吐く言霊八百万 co2深まる道中 滲む墨汁秒速340

眼奥深く聳え立つ富岳 又とない平凡に研ぎ澄ます哲学

先人の鉄の意思運ぶヘモグロビン 肥大した鉄筋に飛来する詩人 燻し銀

五線譜に踵すり減らす独白 託す様に隠す時差式の疑惑

異変に麻痺した耳に意味深 継ぎ接ぎ心身 中指へと登れ確信

蜘蛛の糸を登る進化論 混沌ノートどろろ滴る呪文

モノトーンで色を魅せる歌舞伎者 見えないモノと呼応 故に孤高

朗報届かぬ内 朽ち果てようと本望 800の虚言の後 見え透いた嘘

森羅万象の凸凹から鳴る伴奏 これはまだ先がある為の序章

360°囲む韻律 四六時中吐く言霊八百万 co2深まる道中 滲む墨汁秒速340

33回転 漆の年輪ドラマチック 100年後その先よろしくプラスチック

日いずる言語 馳せる執筆 宙を舞う原稿 墨汁sonic

## 『route 34』

1秒前の月明かり 10万光年の星々の喜び 嘆き 生き死に彩るいつもの道程

33契り交わし のらりくらし寂れた町並み 足並み揃え加速 向かい風も今じゃ心地よく

帰りたくなくなるくらい開拓 叶えては また抱く後悔とワクワク

心電図 つんざく脈拍 陸海空 響かす贅沢

跨ぐ日付 そそる蝉時雨 音波に溺れキズけ それぞれの尾根

僕らの方舟 常しえの宴 ツミ重ねた声 空白の夜へ

靴ひもを締めて咎は解かせ 一瞬よ永遠となれ

これまではこの瞬間の為 いつの時代も誰でもない私であれ

ガードレールの向こう 思考回路国道34号

365日無休で開演 46億回転 命の祭典

採点できない魂のサイレンは何年もの時を越える黒い円盤に

乗り込み旅をする 未来を啓発する爆発をおこし

話の続きは遡る振り出し たまに通った道を振り返り

零から十混ぜ合わせループ  $4 \times 4 =$  膨らむ宇宙

真空に浮かべる喜怒哀楽 口遊むリズム イズム嵌めるパズル

七つの海が育んだインク 一語一句 流るる滾る深紅

太陽とリンク 円を描く寝具 青いリング34を軸サンプリング

ガードレールの向こう 思考回路国道34号

靴ひもを締めて咎は解かせ 一瞬よ永遠となれ

これまではこの瞬間の為 いつの時代も誰でもない君であれ